株式会社トモグリーン・ケミカル
第196号 2026年10月1日発行
当社ウェブサイトにてバックナンバー掲載中
https://www.tomo-green.com/

秋 冬 10～1月の管理ポイント

土壌が乾燥しやすい季節です。土壌の乾燥が長期間続くと撥水物質が増え、ドライ症状が発生してしまいます。
冬場は代謝や生理反応が低下しているので、ダメージが見えにくく見逃されがちです。
春になってダメージが目立つようになってから対処しても回復は困難ですので、冬場も水管理に気を配り続けましょう。

自然な色調の着色剤

カラーメイトNEO M・D

カラーメイトNEOは、季節感を重視した自然な色調に仕上がる着色剤です。耐光性の高い顔料の粒子が鮮やかな緑色を演出し、耐水性の高い樹脂が色落ちを軽減します。色調の好みや目的によりM(明るい緑)とD(暗い緑)の2色から選ぶことが出来ます。地温・葉温を上昇させることにより、春季の立ち上がりを促進します。芝の色を美しく引き出すため、冬枯れする前の使用がおすすめです。

使用量：2ml/㎡　希釈倍率：50～100倍　　散布水量：100～200ml/㎡

高親水性土壌用界面活性剤

バイタルドロップ

高親水性のバイタルドロップは、散布時に葉の表面や表層の撥水性土壌に付着する量が少なく、深い層まで素早く届いて処理層を形成します。散布液が高濃度になる少水量散布でも高い効果が得られます。真夏にも安心して使用できる安全性の高い製品です。ドライスポットの予防と治療、どちらの目的でもご使用いただけます。

ドライスポットの予防　使用量：1ml/㎡/月　散布水量100ml/㎡以上
ドライスポットの治療　使用量2ml/㎡　散布水量100ml/㎡以上

冬季の乾燥対策
液肥とのタンクミックスに

グリーンシナジー

近年は非常に乾燥した冬が続いています。冬の乾燥害は春や夏に比べて目立たないため軽視されがちですが、実際はトップシーズンにドライスポットが発生する最大の原因になっています。また冬の乾燥により、春のコウライの立ち上がりが遅くなることも問題視されています。

グリーンシナジーは様々な資材と相性がよく、タンクミックスしやすい界面活性剤です。肥料、ミネラル、糖、アミノ酸などと混用すれば、水と一緒に根圏の隅々まで行き渡ることで利用効率が上がり肥料ムラを防ぎます。経済的な資材なので、散布の度にご使用頂けます。冬季にも定期的な予防散布による乾燥対策を行いましょう。

張芝した箇所の乾燥対策には、スポット処理しやすい粒剤タイプのハイドレーターGがおすすめです。

使用量：　1～2ml/㎡/月　　散布水量：100ml～1ℓ/㎡　使用方法：資材の散布時にタンクミックス

芝生の耐乾性
耐寒性を高めましょう

プランツコート

プランツコートで茎葉部をコーティングすることで、冬の乾燥害や霜によるダメージを軽減することが出来ます。着色剤と組み合わせると、葉面温度が上昇し霜が早く溶けます。

散布薬量：1ml/㎡　散布水量：100～200ml/㎡

冬季のサッチの除去
土壌微生物の健全化

サッチ・マネージャーW（ウィンター）

本剤は自然界に存在する微生物の中からサッチ成分に対して優れた分解能力があり、低温期でも活性の高い有用菌を選抜した微生物資材です。低温期のサッチ分解能力が高く、春期の気温が上がる時期までにゆっくりとサッチを分解します。

使用量：グリーン.0.25～0.5g/㎡　散布水量0.2～0.5ℓ/㎡

病害予防に

グリンオキシラン水和剤

グリンオキシランは有機銅とキャプタンが有効成分の防除剤です。着色剤入りで希釈液が緑色なので、散布した後の葉が黄色くならず、美観を損ないません。幅広い病害に効果があり、更新作業時の保護殺菌にお勧めです。

使用量：ベントグラス_希釈倍率300-500倍 1-2ℓ散布/㎡　日本芝 希釈倍率500倍 1-2ℓ散布/㎡

株式会社トモグリーン・ケミカル
第196号 2026年10月1日発行
当社ウェブサイトにてバックナンバー掲載中
https://www.tomo-green.com/

芝生管理のマメ知識　第196号

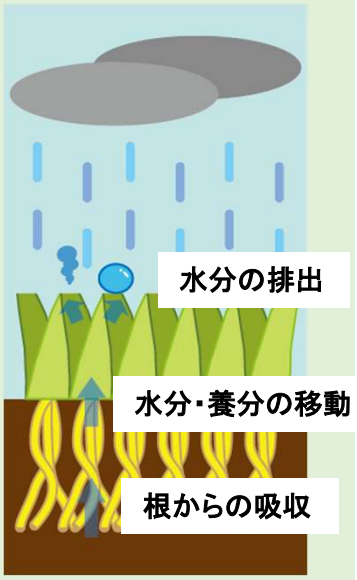
長雨による植物への影響

今年の夏は、過去数年に比べ暑さは厳しくなく、ベントにとって乗り越えやすい夏でした。一方で、雨の日が多く、時には激しい雨もあった夏でもありました。今回は、雨が続いてしまうと植物にどんな影響があるのかを解説します。

地上

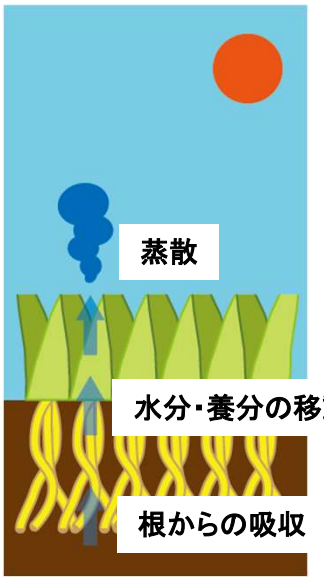
地上では、雨の日の湿度は80%以上になることが多く、**高い湿度が維持**されます。

高湿度（雨の日）



高湿度では**蒸散ができない**ため、根から吸収した水分が過剰になると、葉の切り口や葉の先端の小さい穴（水孔）から水分を排出する（**いっぴつ液**という）

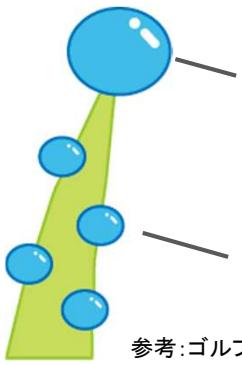
低～中湿度（晴れの日など）



蒸散により土壌中の水分を吸うことで水を確保する
気化熱で葉身を冷やす、根から吸収した栄養素を地上部へ運ぶ役割も担う

Tips　露といっぴつ液の違い

早朝に観察される芝生の朝露ですが、よく見ると大きさの異なる水滴があります。



いっぴつ液（溢泌液）
葉の先端につく大きめの水滴
植物由来の水分であり、植物体内の栄養素を含む

露
葉面につく細かい水滴
大気の水分が放射冷却により凝結したもの

参考：ゴルフ場セミナー2026年10月号「Dr.マイクの芝草科学教室」

いっぴつ液に含まれる栄養素は糸状菌のエサになってしまい、リゾクトニア病やダラースポット病などの**病気の発生につながります**。葉身が8時間以上濡れていると葉身の病害を引き起こしやすいと考えられているようです。

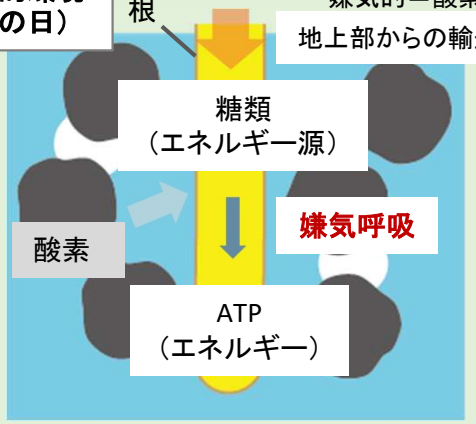
雨が続くことでベントグラスにとって過ごしやすい気温となる一方で、病気や根の生育不良などの影響もありそうです。
排水性の良い土壌管理を心掛け、暑くない夏の管理も必要になるでしょう。

地下

地下では、雨水によって土壌水分値が高まり、土壌酸素が少なくなる**嫌気的**な土壌環境になります。

嫌気的環境（雨の日）

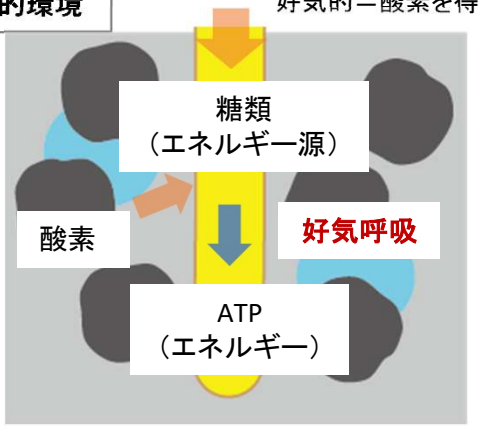
嫌気的＝酸素のない環境



根部で酸素を得られないと、糖類を**嫌気的に**使用して**エネルギーを得よう**とします。この時のエネルギーは好気的な環境に比べ約1/20程度になってしまいます。
一時的に生存はできますが、**長期的に続くと根が傷む大きな原因**となってしまいます。

好気的環境

好気的＝酸素を得られる環境



植物の地上部は光合成によりエネルギーを作ることができます。一方、**光の届かない地下部**では、地上で作ったエネルギー源を酸素とともに消費（呼吸）することで、エネルギーを得ています。

Tips　イネ科植物の通気組織



通気組織（aerenchyma）
地上部からの酸素を通す管
イネ科以外でも土壌の冠水に応じて形成するが、イネ科は好気的でも通気組織を有する

同じくイネ科のベントグラスでも通気組織は確認されていますが、**冠水状態では生育低下する**ようです（Y. Jiang, K. Wang, 2006）。また、土壌が過湿（30%以上）であると、**病気が出やすい**、という報告もあり（ターフニュースNo.158, 2026. Sep）、長期的な過湿な土壌は避けるべきでしょう。